世界的観光地スペイン・バルセロナでテロ

宗教的指導者が主犯格で実行

海外レポート

国際ジャーナリスト 国木田 勝

テロリスト勧誘の場は刑務所

世界的に、特に欧州では観光の地として知られるスペインで、去る8月17日午後、市民の群れに車が突入、観光客13人を殺し、約100人を負傷させた。スペイン政府はテロと断定、警察は2人を拘束したが、運転していた実行犯は逃走した。過激派組織「イスラム国（IS）」は17日、系列ニュースサイトで「ISの戦士が攻撃を行なった」と犯行を声明し、シリアなどでIS掃討作戦を行なう米軍主導の有志連合への報復としているようだ。

事件後バルセロナで警戒に当たる警察（スペイン国家警察）

イラク政府が7月、ISが拠点とした北部モスルの解放を表明して以降、欧州でのこの種の大型テロは初めてという。

日本人が巻き込まれたとの情報がないのが、せめてもの幸せ。何しろスペイン・バルセロナは、丁度フランスの真南に接し、地中海の真上で、日本人の観光客が毎シーズン大勢訪れることで知られている。

テロはこの後も続いた。スペイン警察当局は18日、バルセロナから南西約120㎞のカンプリスで銃撃戦があり、テロ容疑者を包囲し、5人を射殺したことを明らかにしている。バルセロナのテロと関連している疑いがあると見て捜査中。この制圧作戦で市民ら7人が負傷した。現場では、路上に倒れている人々に住民が心臓マッサージを施すシーンが見られた。発生当時、現場では車がぶつかった歩行者や自転車に乗った人達が次々と宙を舞った。事件後多くの市民が病院を訪れ、負傷者のために献血を申し出ているという。スペインのラホイ首相はツイッターで「テロリストは結束した人々を打ち負かすことはできない」と述べ、テロに屈しない姿勢を示すと共に、テロ警戒を強化する方針を示した。

事件のあったランブラス通りは、カタルーニャ州出身の、あの世界的に著名な建築家、ガウディが設計した建築途中のサグラダ・ファミリア大聖堂（世界遺産）や、ピカソ美術館などが近くにある観光名所。日本人旅行者にも人気のスポット。

実行犯と見られるアブヤクーブ容疑者（スペイン国家警察）

スペインのこのテロは15人が死亡、100人以上が怪我をした連続テロ事件。犯行グループは40代半ばのイスラム教指導者アブデルバキ・エ・サティ容疑者が主導し、少なくとも2カ月前から準備を進めていた。サティ容疑者は2004年のマドリード列車同時爆発テロで服役中の受刑者と刑務所で接点があったと報じられている。どうやらここに過激思想の再生産とテロの連鎖を断てない欧州の構造的な問題が改めて突きつけられているようだ。

調べによると、サティ容疑者はテロ前夜の16日（8月）深夜、バルセロナ南西約200kmのアルカネナーにあるグループのアジトで、爆発物製造中に誤って起きたと見られる爆発で死亡した。

スペインのホライ首相（スペイン首相府）

サティ容疑者は違法薬物をモロッコから密輸して有罪となり、2010～14年にスペイン国内の刑務所で服役、同じ刑務所にいたテロ犯罪者達を通じて過激思想に感化されたと見られ、出所後はフランス国境に近い人口1万人強の田舎町リポイでイスラム教指導者になっていた。

AFP通信の情報によると、容疑者と同じ集合住宅に暮らす男性の話では、サティ容疑者は口数も少なく、自宅に人の出入りもなかったという。

リポイのイスラム・コミュニティを介し、サティ容疑者は犯行グループ11人（内1人は拘束後、保釈）の10～30代のモロッコ系の男達と知り合ったが、特に信心深いわけではなく、捜査当局は1件の発生テロからでも若者達が過激思想に影響される可能性は危険なほど大きくなっている、と憂慮している。

際限なく拡大する過激思想

欧州では社会的、経済的に立場の弱い移民系の男達が軽犯罪を繰り返し、収監先でサティ同様過激思想に傾倒して出所後、テロ計画で中心的な役割を果たす例が続く。毎日新聞・八田浩輔記者の報道によると、親族など身近な関係者で犯行グループ構成する点でも、今回のスペイン・テロはパリ同時多発テロ（2015年11月）やベルギー同時テロ（2016年3月）と共通点が多いと言う。

アルカナーのアジトからは大量のガスボンベや爆薬のTATP（過酸化アセトン）も見つかった。アジトでの爆発事故で重傷を負い拘束されて20代の男は、去る22日に裁判所に出廷、サティ容疑者を主力に少なくとも2カ月前からより大規模な爆破テロ計画を立てていたと述べた。

当局は爆弾製造の失敗が理由で車両を使ったテロに方針を転換した可能性もあると見ている。犯行声明を出したISとの関係は不明のままで、スペイン当局は容疑者達が短期間で過激化した経緯を含め捜査を進めている。

テロは今回のスペインに留まらず、アフガニスタン南部ヘルマンド州の州都ラシュカルガーで、8月23日、治安部隊を狙った自爆テロがあり、州当局によると、少なくとも7人が死亡、88人が負傷した。

反政府勢力「タリバン」が犯行声明を出した。死傷者には学生が多く含まれており、周辺各国では一種のパニックを引き起こしている。8月30日早朝、北朝鮮が太平洋に向けて、日本列島を飛び越した形で弾道ミサイルを発射、世界中の怒りを買っている。

さまざまな形、つまり機動力、動員兵力など世界に広がるテロは〝百鬼夜行〟の有り様。その証拠に8月25日未明、ミャンマー西部ラカイン州で少数派イスラム教徒「ロヒンギャ」の武装集団と国軍との間の戦闘が激化している。双方の死者は合わせて100人を超えた。このグループ（組織）は、ラカイン州に住むベンガル系イスラム教徒で、北端部を中心に推定100万人が暮らす。ミャンマー政府との対立を深め、国連などは「世界で最も迫害されて来た民族」といい位置づけている。

対立のルーツは英国統治時代の19世紀。仏教徒ラカイン族の土地にベンガル地方から大量の移民が流入したが、植民地支配を行なう英国は自らに不満が向かないよう分割統治を行ない、少数派、多数派を反目させた。

今後の〝テロの時代〟はどんな形を取って進展するのだろうか。もちろん〝悪い意味〟を込めて、だが……。